

考えよう! 自分らしい ワークスタイル

働く人たちの声
今、働くことのリアルを知ろう
「自分らしいワークスタイル」の見つけ方
「働く」ことで自分を生かすためのQ&A集
「働く」ことで凝り固まった心をほぐす処方箋

「働く」を衣装から探る 仕事と服装の関係について 教えてください

服飾史家／明治大学国際日本学部特任教授
中野香織さん

仕事人インタビュー 南沢奈央さん

様々な方の働きから
成り立つことを
忘れずに期待に応えたい

「働く」をアプリで快適に ワークスタイルをサポートする アプリセレクション

4コマまんが 『後輩ユニオくんOJT日誌』

Think Work

鈍い圧迫にみんなで向き合う

夏目漱石の『三四郎』という
青年小説がある。遠く熊本から
東京の大学に進学してきた新入
生の三四郎は、次のような先輩
たちの就活話を聞く。

「講義の合間に今年の卒業生
が何処其処へ幾何で売れたと云
う話を耳にした。誰と誰がまだ
残っていて、それが官立学
校の地位を競争している噂だ
どと話しているものがあつた」。

今も、就活話は学生たちの関
心事だ。ところが、「三四郎は漠
然と、未来が遠くから眼前に押
し寄せるような鈍い圧迫を感じ
たが、それはすぐに忘れてしま
つた(傍点筆者)」。多くの若者
そしておじさんやおばさんも若
い頃、このような経験をしてい
る。つまり、「未来」を現実的に
想像することには「鈍い圧迫」
が伴い、面倒くさいことなので、
自ら率先してそれを忘れようと
する。

とはいえ、日本経済が好調で
あつた時代は、とにかく会社と
いう居場所に「(就社)すれば、
何も考えなくても万事OKであ
つた。終身雇用という言葉がリ

アリティを持っており、定年ま
での人生は会社が丸抱えでデ
ザインしてくれた時代である。

しかし、今は違う。会社に定
年までいられる人生は少数派な
のだ。働き方、そして結婚、育
児、介護という暮らし方につ
いて「(自前のもの)を考えなけ
ばならない」。

たった一人で、それを考える
ことは、大きな負担だろう。で
も、みんなと一緒に考えるこ
とはできるかもしれない。

一人ひとり違うワーク・ライ
フをみんなで作ることはできる
かもしれない。



梅崎修
(うめざき おさむ)
法政大学
キャリアデザイン学部教授

1970年生まれ。大阪大学経済学研究科博士後
期課程修了(経済学博士)、同年政策研究大
学院大学オーラル政策研究プロジェクト研究員、
2003年法政大学キャリアデザイン学部専任講師、
2015年より現職。『仕事マンガ! -52作品から
学ぶキャリアデザイン』(ナカニシヤ出版)